

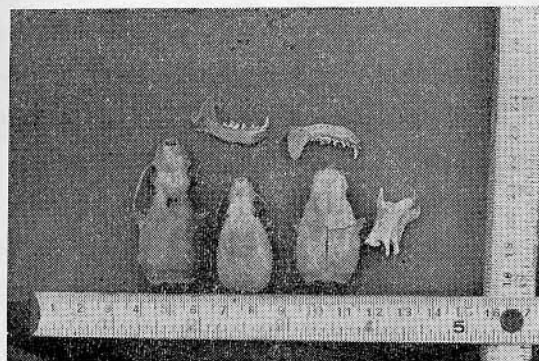
安家洞くつ群の生物と化石

水島 淳



(I) ムササビ

永渡洞(岩手)



(II) イタチ

永渡洞(岩手)

1. 安家洞の生物

安家洞(横穴)に於ては、ゆっくり腰を落着けて石や落葉をひっくり返したり、ひっかき回す時間がなく、受身の体勢で生物を採集したの

で特記すべき成果は現われなかった。時々ヘッドランプの光の中から、さも安眠を妨害されて怒っているかのようなコキクガシラコウモリが音もなく闇に姿を消す。彼等が闇の中で自由に飛行できるメカニズムは誰もが知っているが、しかし、導線を洞内が白くなるほど置いていても、帰りには『ハテ? 夕道を間違えたかな?』と、思わねばならぬような入り組んだ洞窟や、落盤の片隅に、先洞への入口を持っているような洞窟に、どのようにして出入するのか、そして年中変化のない地熱に包まれた洞内で、どうして来冬を知って冬眠し、来春を知って洞外をさ迷うのか、——一説に『コウモリのようなヤマネ型冬眠をする動物は、排泄物の著替により春を知る。』とあるが——少なくとも私には不可解である。それよりも、安家洞のようにバカデッカイ洞窟ではフィアンセとデートするのも苦勞するだろう。——もっともラブレター用の特殊通信用超音波送受信装置を活用すれば人間世界よりも簡単かも知れないが——普通、一般にはコウモリは同性集団で冬眠するが、安家洞に於ては単独冬眠、又は飛行している者のみが目に止った。江頭新洞の試練の門附近で藤原君がナガコムンを見つけた。草白で2本の長い触角と尾が印象的である。彼女は生まれてこのかた、お天道様にお日通りをさせてもらった事もなければさせてもらおうとも思った事もない。きっとテッテイテキに光を嫌う人物(虫物)

なのであろう。洞窟内の生物は他洞の同種生物から隔離されている。つまり、ある洞内生物がある種の突然変異を起した時、その変異はその洞内のみに於て拡散し、他洞とはまったく異った生物を製造する。これは洞内永住生物に限らず、地上の生物が両性一対となって洞内に落ち込んで、洞外の同種生物から隔離された場合も同じ結果を生む。とにかく洞内生物は、それを見つけて観察するケイバー——特に生物に興味を持つ者——とは異って変人(変虫)が多いのである。安家洞の入口附近は永と枯葉に覆われている。その枯葉をチョイとひっくり返すとガロアムシより一回り大きなハネカクシの一種の幼虫が、これまた白い大きな目玉をキョロッとさせていた。

2. 喜惣治穴の生物

この横穴では、全国的に個体数の少ないウサギゴウモリを見つけた。このゴウモリはウサギの様な長いデッカイ耳を持っている。ヒョイと見ただけでは、『アレ、耳が四つつも』と、思われるような耳殻構造だ。微弱な超音波をキャッチするにふさわしいパラボラアンテナである。剥製にしようと思い、ハンカチに包み、ヘルメットの顎紐にひっさげて小屋に持ち帰ったが、彼は小屋の天井裏がよほど気に入ったらしく、帰阪の日になってもお別れの挨拶もしに来なかった。しかし天然記念物に指定されていると知った現在、彼に感謝している。この洞窟では小動物の左坐骨と、部所不明の円筒形骨の化石、ナガコムシを採集した。

3. 永渡洞の化石

この洞窟には横穴にも似ず、オコツがゴロゴロしている。人差指と親指で作った円ぐらいの

ガイコツが、ヘッドランプの光の中で、歯をむき出してニタッと笑っている。中には顔に泥を塗りたくったやつや、口の中一ぱいに泥をほおばってモグモグしているのがいる。モグモグできるのはよいが、ひどいのになると下顎をどこかに失ってしまって、上顎の前歯だけで泥に噛付いているやつや、歯が抜けてしまって入れ歯を必死で捜し求めているのもある。それにしても我々の苦勞を察してか、わざわざ全身の骨を一まとめにして置いてくれた親切なムササビ(写真I)がいたのには感心した。こんなやつはムササビ社会でもモテタであろう。ライトに映るオコツを全部拾い集めると、いよいよモグラかアナグマのマネコトをしなければならない。泥の中に沈没しているオコツの引き上げ作業である。堀っている手が、脳天の奥深くにまで泥が詰まったガイ骨をまさぐり出した時、一人のケイバーは、山景に酔う岳人や、サンゴ礁に我を忘れるダイバーの心を知るのである。そのケイバーが、泥に汚れた顔に、ニヤッと微笑を浮かべるのもその時である。——ケイバーが天然の石の乱舞に心を奮われる事はいうまでもない——。骨の中にはガイ骨に限らず、頭から離れて単独歩行を試み、迷子になった手足の骨がある。『暗いので帰り道がわからなくなったのかな?』化石はザーッと見ただけでもノウサギ、ムササビ、イタチ(写真II)、ネズミ、ヘビ、ゴウモリに区別できる。専門家に見てもらえばもっと多数の種類になるだろう。

4. 風穴の生物と化石

風穴(縦穴)では、ゆっくりと腰を据えて生物や化石の採集ができた。安家洞では1匹しか見かけなかったナガコムシがウジャウジャと這い廻っている。ナイロン袋に詰め込むのがじゃ

まになって、途中で投げ出してしまった。少なければあれほど興味の湧くやつでも、こうも目の前をチラチラされては目ざわりだ。この穴には化石とまではいかない骨がごろごろしている。あまりにも新鮮なので、まだ毛皮が所々に残っているのがある。ひどいになると、1ヵ月ほど前に投身自殺——死んでから葬られたか?——をした犬の死体がある。デレーツとなった体から湧き立つ悪臭が鼻をついた。パーティーの中で、私にそれを引き上げるように命じた人がいた。ザイルに結び付けられたシッポが、引き上げる途中でブツリとチョン切れた時はゾーッとした。この穴でニギリコブシの半分ほどの椎骨が二三見つかった。牛のものだとすると、投身自殺を強行したのは犬だけにあらざるようだ。

5. 小屋周辺の昆虫達

洞窟の入口を探すために、膝まで埋まりそう

な落葉をガサガサ踏み分けていると、足元からヒラヒラと白い蝶が舞い立つ。前翅の先端がカギ形に曲ったスジボソヤマキチョウである。彼女はきびしい冬を枯葉の下で過したのである。『これがあの蝶か?』と疑わざるを得ない。あの美しい黄色は色あせて、所々にしみが付き、羽根の美しいはずのカーブは原形を留めず、ただ越冬の苦闘を物語る破れた羽根がいたいたしく目を刺す。時々ヒオドシのヨロイをまとったヒオドシチョウが、風に飛ばされた枯葉のように飛んでいく。この蝶も越冬隊の一員だ。しかしその中でも鼻の突き出たテングチョウは、バリッとした服装をしていた。彼は冬を経験した後も紳士の身だしなみを乱してはいない。もうすぐ春である。ヤマトシジミが空の青に溶け込んでいった。ゼフィルスが虫キチガイの心を誘惑するのも間近であろう。

みずしま・きよし(経済学部学生)

美山動物群，岐阜，熊石洞調査報告

水 島 淳

1. 熊石洞

熊石洞は岐阜県郡上郡八幡町美山の熊石部落にある洞口2.5m深さ150m程の石灰洞である。この附近の地形は飛騨高原南部に当り、700m~1000mを頂とする山地である。西には吉田川と上ノ保川とが八幡町で合流、長良川となって南流している。石灰岩は秩父古生層で、フズリナの化石からペルム紀のものであることが判明している。この地域のペルム紀層は上位か

ら、粥川層(厚さ950~1200m)、島谷層(420m以上)、口洞層(400m以上)、安久田層(400m)の四つに区分される。熊石洞はこの内の安久田層に属し *Pseudoschwagerina uddeni*, *Acervoschwagerina Fujimotoi*, *Pseudoufsulina nelsoni*, *P. ambigua*, *P. vulgaris* などを含んでいる。熊石洞の洞口から18m下った所にホールがあり、N60°Wの方向、北東